

キリストの光 光のキリスト

復活の主日 4月8日

(ヨハネ20・1—9)

「…もう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」

今まで、五十回以上も四旬節を過ごし、五十回以上も復活祭を祝ってきた。毎年、四旬節が来ると回心への呼び掛けを聞き、生活の見直しをして自分の罪を思い、悔い改めてゆるしを求めてきた。それは到達できもしない完璧な生き方―道徳的に―を、目指す旅でもあった。そして、そこにはいつまでも変わらない自分がいた。堂々巡りをしているような自分がいた。

今まで自分はいったい何を信じて生きてきたのだらうと思ふ。

キリストの弟子たちも同じ思いだったのかもしれない。イエスと寝食を共にし、彼

今まで何を信じて

の言葉を聞き、彼のすることをつぶさに見ていたにもかかわらず、弟子たちは、そして他の人たちも、その意味するところが分からなかった。

病が癒やされることを望み、イエスがこの世界の王として君臨すると思ひ、その時が来たら人々の上に立つことを求め、平穏で楽になる人生を手に入れようとする…。イエスが死んでしまふまで、最後の最後まで人々はそれを望んでいた。

イエスが十字架の上で死んだ時、弟子たちは、今まで自分はいったい何を信じて生きてきたのだらうと思つたのではないだらうか。

自己中心的な信仰。ひたすら自分の救いを求め、死んで

も生き続けることを希望し、
 するためにこの世界の苦しみ
 を甘んじ受け、耐えようとす
 る。そのために、数々のおき
 てを完璧に守ること、自分の
 罪を減らすことを人生の最大



の目標として生きようとする。
 それは、結局は自分の救
 いのみを求める自己中心的
 な信仰ではないか。
 そのような信仰の在り方を
 非難しているのではない。こ

のわたしがそのような生き方
 をしていたことに気づかされ
 たのである。

「見て、信じる」とはどうい
 うことなのだろうか。復活す
 ることは目的ではなくて、結
 果ではないのか。大切な
 は、徹底して低みで生きられ
 たイエスの生き方を今、生き
 ることではないのか。イエス
 は言われた。「わたしが愛し
 たように、互いに愛し合いな
 さい」と。

わたしたちは、愛し合おう
 としている。愛し、愛される
 ことをだれでも望んでいる。
 しかし、まだ「自分が望むよう
 に」愛そうとしている。その
 結果もまた堂々巡りである。

イエスの復活を信じると
 は、低みにある人々と徹底的

に生きたイエスを「引き上げ
 られた」天の父の思い、望み
 を一番大切にして生きるこ
 と。イエスが父である神を信
 頼して生き抜いたように、わ
 たしたちも信頼して歩みを始
 めること。

空の墓を見た二人の弟子は
 自分たちのところに戻ってい
 った。もう彼らは元のような
 生き方はしない。イエスの十
 字架の道を、今度は弟子たち
 が歩むことになる。

(山元眞||福岡教区司祭/カット||高崎紀子)

今週の福音

9日・月	マタイ	28・8—15
10日・火	ヨハネ	20・11—18
11日・水	ルカ	24・13—35
12日・木	ルカ	24・35—48
13日・金	ヨハネ	21・1—14
14日・土	マルコ	16・9—15